

L. リチャーズ著
大谷順子・大杉卓三訳

質的データの取り扱い

北大路書房／2009年7月／290頁／3360円



阿古智子

質的研究とは

社会科学における研究の手法はさまざまな観点から分類できるが、「量的研究」と「質的研究」という分け方もその一つに当てはまるだろう。ごく簡単に説明すると、量的研究は計量経済学などが採用する手法であり、最初に仮説を設定し、それを数量データで証明する形式をとる。一方、質的研究は人類学をベースに発展した手法であり、可能な限り固定観念を排除し、あらゆる方面の情報を集めた上で、徐々に重要な概念や分析の枠組みを見出していく手法である。人類学では民族調査が主に行われてきたが、現在では、現代社会におけるさまざまな集団や組織、個人を対象にした研究で質的研究法が活用されている。

私は香港大学の大学院生時代、質的研究法の授業を受講し、博士論文執筆のために、一年あまりの年月をかけて中国の中学校・高校で質的データを収集した。本書を読み、若かりし頃に学んだことを再確認すると同時に、当時は気付か

かったことを新たに発見することができた。

本書でも説明されているように、質的研究はデータの収集から分析に至るまでのプロセスを大切に手法である。特に、研究者が自身の立ち位置を確認し、自らがどのようなバイアス(偏見)をもっているのかを認識することが重要である。常にコンテキストのなかでデータをとらえ、研究の各段階で創出する分析の枠組みは、結論を導き出すまで絶えず修正を繰り返すことが可能である。

私は博士論文のための調査において、「参与観察」を行った。「参与観察」は質的データを得るのに非常に効果的な手法であり、「参与」と「観察」を通じて被調査者に近づいていくのである。「参与」と「観察」のバランスはどのような特性をもつ研究を行うかによって異なる。たとえば、「観察」を重視する研究の最も分かりやすい事例として、被調査者に分からないようにビデオカメラを設置し、被調査者の行動・発言を記録するというやり方がある(注・当然ながら、

個人情報保護や倫理的な問題に関わるため、研究成果の発表方法に関して被調査者やその関係者の同意が必要となる)。こうすれば、研究者は存在を気付かれることなく観察を続けることができる。被調査者が記した日記、手紙、ウェブサイト、ブログなどの分析も、研究者が被調査者と直接関わることなく分析できるという意味で、「観察」を重視していることとらえることができる。

一方、「参与」を重視する研究では、研究者自身、被調査者が活動する地域や組織に長期間にわたって入り込み、その地域・組織で活動することが求められる。たとえば、都市社会学の古典的名著である『ストリート・コーナー・ソサエティ』(有斐閣、二〇〇〇年)の著者ウィリアム・ホワイトは、アメリカ・ボストンのイタリア系スラムのコミュニティに四年間住み込んで調査した。『暴走族のエスノグラフィ』(新曜社、一九八四年)の著者佐藤郁哉は、調査のために暴走族の活動に加わっている。つまり、研究者は調査する集団や組織におい

てどのような「内部者の役割」(insider role)をもつかによって、自らの立ち位置を決めるのである。

ただ、ほとんどの場合、「観察」と「参与」のどちらかに大きく偏るのではなく、バランスを考えながら行うことが一般的である。それは、現場に入り込みすぎて被調査者と特定の利害関係ができしまつと、研究が成り立たなくなるどころか、いつの間にか研究者ではなく、スラムや暴走族の一員になってしまう可能性さえあるからである。逆に、直接現場の人たちと関わるのがなければ、観察するシーンや分析する文書のコンテキストを具体的に読み解くことが難しくなる。

中国研究における質的研究の意義

地域研究(areastudies)としての中国研究は学際的(interdisciplinary)である。経済学、社会学、法学、政治学、歴史学など、さまざまな学問分野の手法を採用し、中国という国、その国の一部を成す地域、民族、組織、時代などを研究する

のである。しかし、学際的な学問であるとされていても、実際には、各研究者がそれぞれ学んできた学問の手法に準拠して研究を進める場合が多く、分野を越えて活発に議論が行われることは少ない。

同じテーマを研究するにしても、手法によって設定される問題意識や分析の枠組みは異なり、導き出される結論に差が見られることもある。それぞれの研究方法のもつ特性を活かし、相互にメリットを最大限に発揮しつつ、デメリットを補うような連携が進めば、より重層的で幅広い視野から中国を理解することができるとはならないか。特に、量的研究と質的研究を有機的に結びつけることができれば、より深い分析が可能になるのではないだろうか。

そのような認識に基づき思い至るのが、日本の中国研究において、現場に深く入り込んでフィールドワークを行い、データを蓄積するというスタイルの質的研究は依然少ないということである。今や、中国の対外開放度は増し、海外からも自由に訪問できるようになったが、通

常、外国人が現地調査を行うには地元政府の許可が必要であり、特に政治的・社会的に敏感な問題を扱う場合、大抵、役人が同行することになる。このような政府がアレنجした調査旅行において、地元の人たちが普段通りの態度を見せることはほとんどないと考えてよいだろう。差し出されるデータの信憑性が疑われることも少なくない。なぜなら、地方政府には地域経済の振興、企業誘致、一人っ子政策の徹底など、さまざまなノルマが課せられており、役人のなかには「政績」（政治面の成績）向上のために有利なデータを作り出すことに熱心な者もいるからである。実際に、私が聞き取り調査によって集めた出稼ぎ労働人口に関するデータは、村が管理している数字とは大きく異なっていた。

厳しい情報統制を行っている中国で、外国人が自由に正確な情報を収集することは容易ではない。だが、たとえば、外国人が大挙して現地を訪れ、調査するのではなく、現場に深く関わっている中国人のNGOスタッフ、研究者、ジャーナ

リストなどに同行する形であれば、地元の人々は心を聞き、普段とほとんど変わらない様子を見せてくれるだろう。

私は拙書『貧者を喰らう国』（新潮社、二〇〇九年）の執筆にあたり、各地で聞き取り調査を行ったが、すべて中国人の知人が何らかの用事で現地に赴く際に同行させてもらう形をとった。最近行った女性セックスワーカーに関する調査も、ローカルNGOが行う健康診断やインタビュー調査を観察させてもらうなかで行った。普段、セックスワーカーと接することがほとんどない私にとつて、彼女たちは特殊な職業に従事している人たちであり、使う言葉からしてまったく異なる。私が初対面の彼女たちに正面切つて質問しても、会話は成り立たないだろう。そもそも、彼女たちはリスクを避けるため、業界外の人間に対して強い警戒心を抱いている。NGOスタッフは男性同性愛者で、セックスワーカーたちから「小弟」（弟ちゃん）と呼ばれ、慕われていた。彼が彼女たちと話しているのを傍で聞いているだけでも、私にとつ

ては非常に貴重な情報を得ることができた。

このような情報収集はジャーナリストのやることだという人がいるかもしれないが、私はそうは思わない。研究者だからこそ、より客観的に、学術的な意義を問いつながら見出す視点があると考ええる。

質的研究法は人類学、教育学、心理学、社会学、医学、経営学などさまざまな分野で活用されているが、肌感覚で中国をとらえるためにも、より多くの中国研究者が注目すべき手法であると思う。

本書の構成・特徴

自分の経験を踏まえての前置きが長くなってしまったが、本書は質的データを収集・分析し、結論を導き出していく過程を非常に丁寧に説明しており、教科書として使うのにも最適な書である。

著者は質的調査研究・データ分析の第一人者であるオーストラリア国際質的研究所所長のリン・リチャーズ (Lin Richards) 教授、訳者は阪神大震災被災高齢者や中国の国際保健政策に関して

多くの研究実績のある大阪大学大学院人間科学研究科の大谷順子准教授及び ICT (Information and Communication Technology) による地域開発・社会開発などを専門とする九州大学大学院比較社会文化研究院の大杉卓三助教である。本書の構成は以下の通りである。

イントロダクション

第1部 セットアップ

第1章 プロジェクトのセットアップ

第2章 質的データ

第3章 データ記録

第2部 データを使つての作業

第4章 データからわかってくること

第5章 コーディング

第6章 アイディアの扱い

第3部 データへの意味づけ

第7章 何をめざすのか

第8章 データの検索

第9章 全体を見る

第10章 研究成果を語る

第1部の研究計画の立て方 (セット

アップ) では、「何を、どのように問うのか」「答えを導くのにどのようなデータが必要であるのか」を何度も問いつながら、徐々に流れを明瞭にする工夫が紹介されている。これは、どのような手法の研究にも通じる内容であるが、研究の過程において何度も問いを繰り返すことは質的研究の特徴である。

質的研究が最初に仮説や変数を設定した上で行う量的研究と異なるのは、研究者自身のバイアスがデータの収集・分析に大きく影響するという点である。量的研究がバイアスの要素を可能な限り削除しようとするのに対し、質的研究はそれをうまく利用することで、データからより多くのことを学ぼうとする。この作業も研究のプロセス全体にわたって繰り返されるが、その方法が本書では以下のように、日常生活における事柄をたえに、非常に分かりやすく説明されている (三五頁)。

「質的研究の目標の大部分は、データから学ぶことである。しかし、研究者

の心は空っぽで真っ白なわけではない。実際、質的研究者に特有の危険の一つは、研究者が強い価値観をもつ傾向にあり、トピックに傾倒しやすいことである。そのため、よい調査デザインというのは、すでに知られている知識に対しても注意を払い、この知識を活用することを常に考慮している」

「この過程の最初の段階は、国際空港に到着してすぐに税関で行うように、あなたの手荷物の中かに何かがあるかを宣言するようなものだと考えればよい。もしそれが宣言できないなら、あなたが何を見るか、またどのように見るか、ということに対してあらかじめ色がついてしまった仮定や予想を不正にもち込んでしまうことになる。調査を通して、アイディアの有効性を最大にし、確実に試すことを目標にしなさい」

バイアスをうまく利用するためには「記録は選択される」ということを頭に

置き、常にコンテキストを含んだ記録を作成しよう心がけることが重要である。選択されなかったできごとについての記録はなく、分析に利用できないのである。質的研究では、「正確で」「コンテキスト明示的な」「厚い記述」を行うことが求められる。

データを収集・記述した後は、それをコーディングする作業を行う。本書は「記述的コーディング」(事例の属性についての情報の保管)、「トピックコーディング」(トピックごとに情報を整理。解釈は含まない)、「分析コーディング」(データの意味を解釈・省察)の方法を紹介している。また、コーディングしたデータをテキスト検索し、再考を重ねた上で理論を導き出す過程も丁寧に解説している。

筆者自身経験したことであるが、質的研究では最初に明確な理論的枠組みを設定しないため、研究者は集めた情報に埋もれてしまい、そこから何を取り出し、どのように解釈することによって研究が意味をなすのかが分からなくなること

しばしばある。しかし、そこで諦めてしまつては、質的研究の醍醐味を味わうことができない。データを前に悩み続けるなかで、質的研究のメリットを生かすためのヒントを多数発見することができ。本書は、いくつかの「データをせきたてる方法」を挙げている。以下、エッセンスを抜き出しておこう(二四〇頁)。

「テーマとともに進む」
脈絡がデータを通してループするようであれば、他にも同様なことが起きているところ(例)を積極的に探し、それに関するもつともらしい説明を求めて、それをできる限り発展させてみなさい。

「ショック戦術をとる」
データを無理やり拡張・再解釈して、想像力豊かに再構築を試みなさい。グループワークでは、精力的な探究ができる——あなたの目標は単に新しいアイディアを得ることではなく、異議を申し立てられた時に耐えられるアイ

ディアを確立することである。力強く満足のいく理論となるまで理論とデータの間で絶えず相互作用を起しなから、あいまいな脈絡に注意を払いなさい。そして、比喩と類推を用いて、それらを追求しなさい。

「比較を行う」

プロジェクトと無関係な研究・日常的な現象との比較を行いなさい。

「他の領域の理論を試す」

別の服を試着するように他の領域でうまく機能する理論を試しなさい。

「信頼していること・疑っていることを書く」

「最も多く言われた」というようなフレーズに逃げ込むのではなく、適合しないものを見出すようにしなさい。例外があるならそれを徹底的に調べ、より包括的な規則を見つけなさい。

ここには書ききれないが、本書には、

読者が読み進めるにつれて段階的にこうした実践を行えるよう、具体的な研究テーマに関するテキストデータやチェック項目が各所に配置されている。また、研究全体の流れをダイアグラムなどで整理しており、質的研究を学んだことのない人でもとつきやすい構成となっている。『中国21』の読者のなかでも特に、現場に入る意欲に溢れた人たちに薦めたい一冊である。